第１章　ヘラウキ概論　その５

前号では、ヘラウキのボディの素材であるクジャクの羽根とカヤの成形について解説してきた。今回は、羽根１本取りウキの脚側の成形と羽根の２枚合わせの成形について、解説していきたい。

１．成型器の使用について

前号において、成型器を使用する経過と理由について述べてきたが、補足をしておきたい。
現代のヘラウキには均一性が求められる。特にトーナメントにおいては、ウキを紛失した際、同じ製品の同じ番手に差し替えても、エサ落ち目盛が変わらないことまで要求される。
この課題への解決策として、「直径やボディの絞りを同じにし、体積を同じにする。」、「成型器を使用し、成型器を物差し代わりにして、同じものを製作する。」という結論に行き着いた。

２．羽根の１本取りの脚側の割り方

羽根の１本取りの脚側の割り方について、通常は、羽根の横から刃物を入れるのだが、羽根の表と裏では硬度が異なることから、後々狂いの原因になる。私の場合は図１のように、左右に刃物を入れる。こうすると、狂いも少なくなるが、割り跡は羽根表面に残ってしまう。
この方法は、採用されている作者は少なく、書籍や YouTube でも公開されていない。
ウキのセンター出しは、当たり前のことであるが、非常に難しく、私にとっては、現在も課題のひとつである。

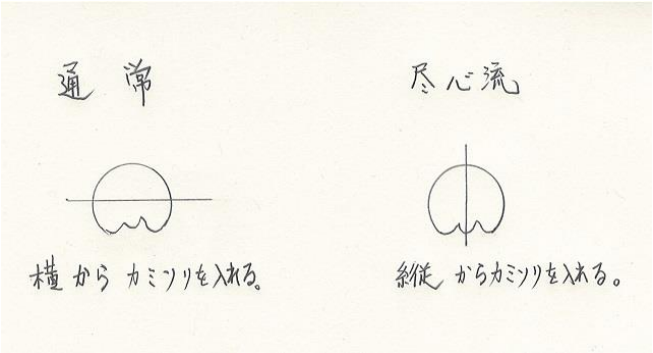


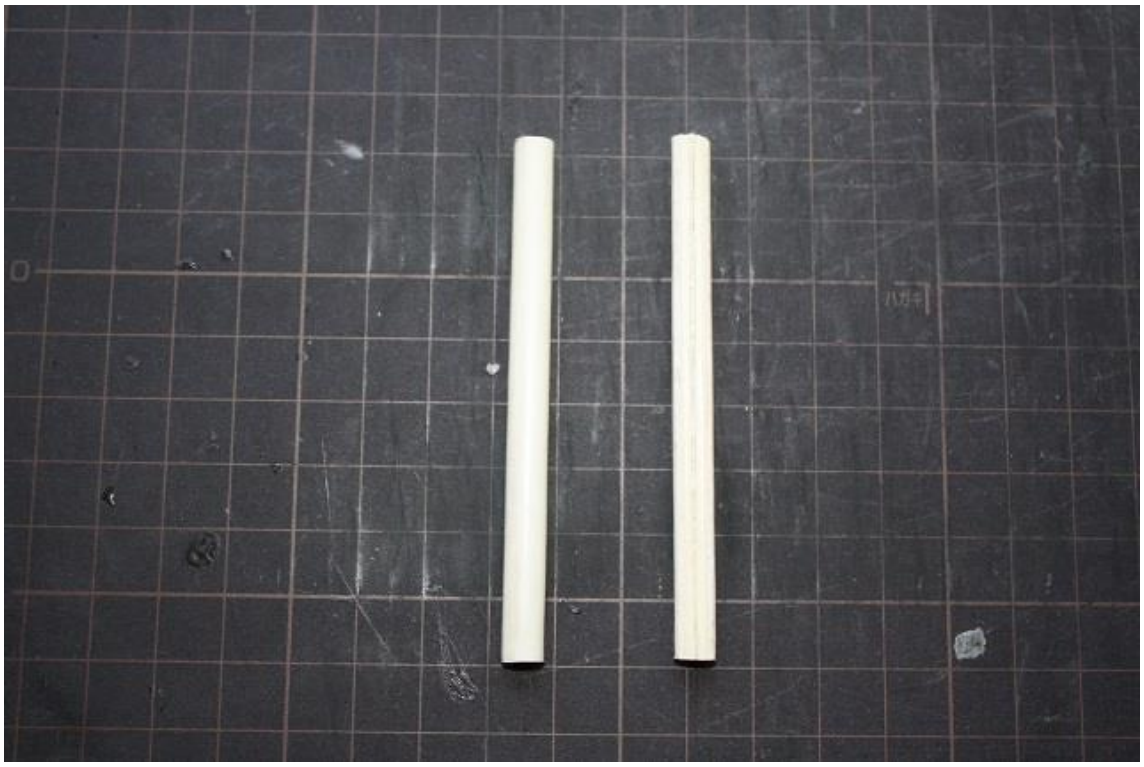
図１：
左側：通常の羽根の１本取りの脚側の割り方
右側：尽心流の割り羽根の１本取りの脚側の割り方

３．羽根２枚合わせの成型について

羽根の２枚合わせも、「分攻め」と呼ばれるカヤ・羽根の直径を所定の径に修正し、併せて、真円ではない場合には、真円に近くなるように修正する工程は共通である。しかしながら、以降の工程が全く異なり、多種類の成型器を使用する。

（１） 羽根の２つ割り

２枚合わせウキとカヤ＆羽根１本取りウキの作り方は、根本的に異なります。

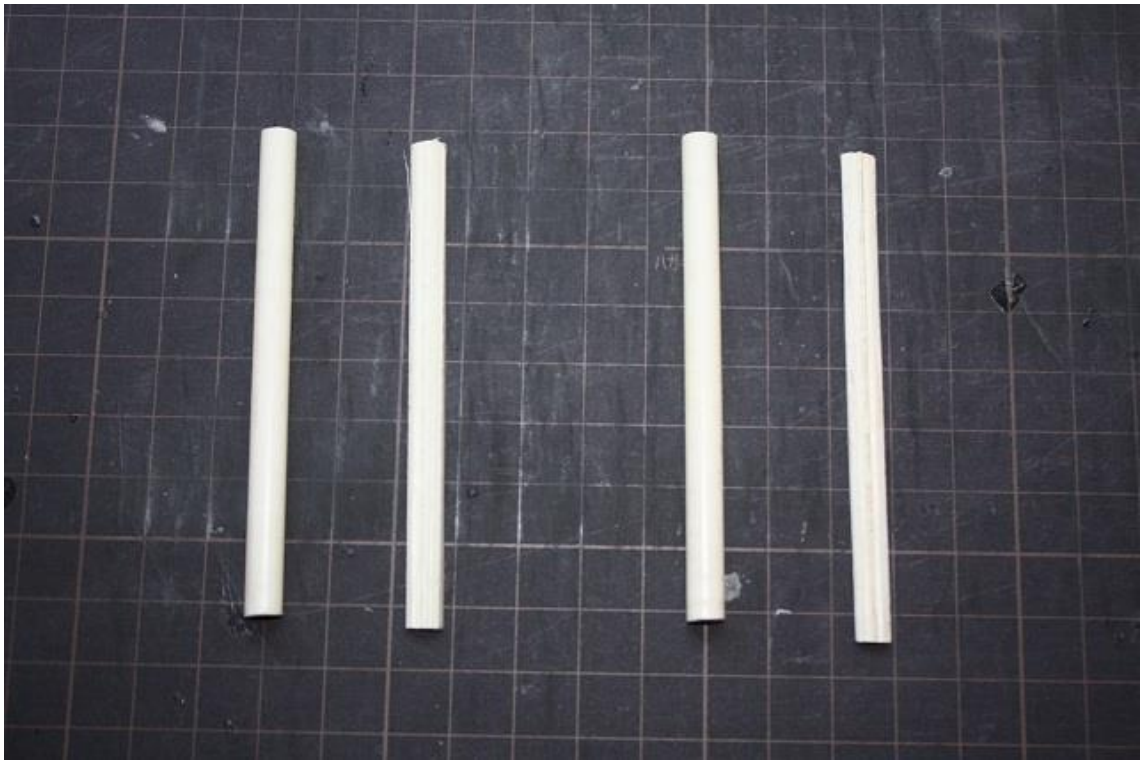


画像１：右側が羽根の表側、左側で筋が入っているほうが、羽根の裏側

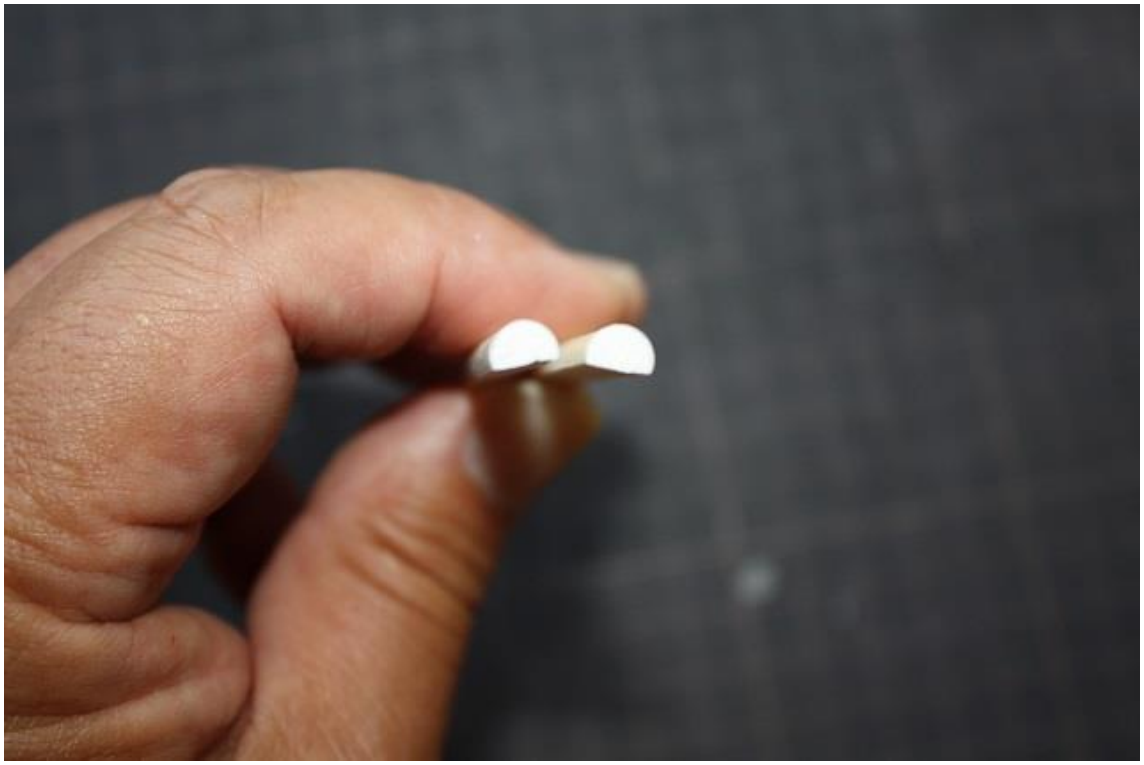
分攻めが終了した２本の羽根の芯を２つ割り台を使って２つに割る。

羽根の２枚合わせを製作する際に羽根を２つに割る

画像２：羽根を２つに割っている様子



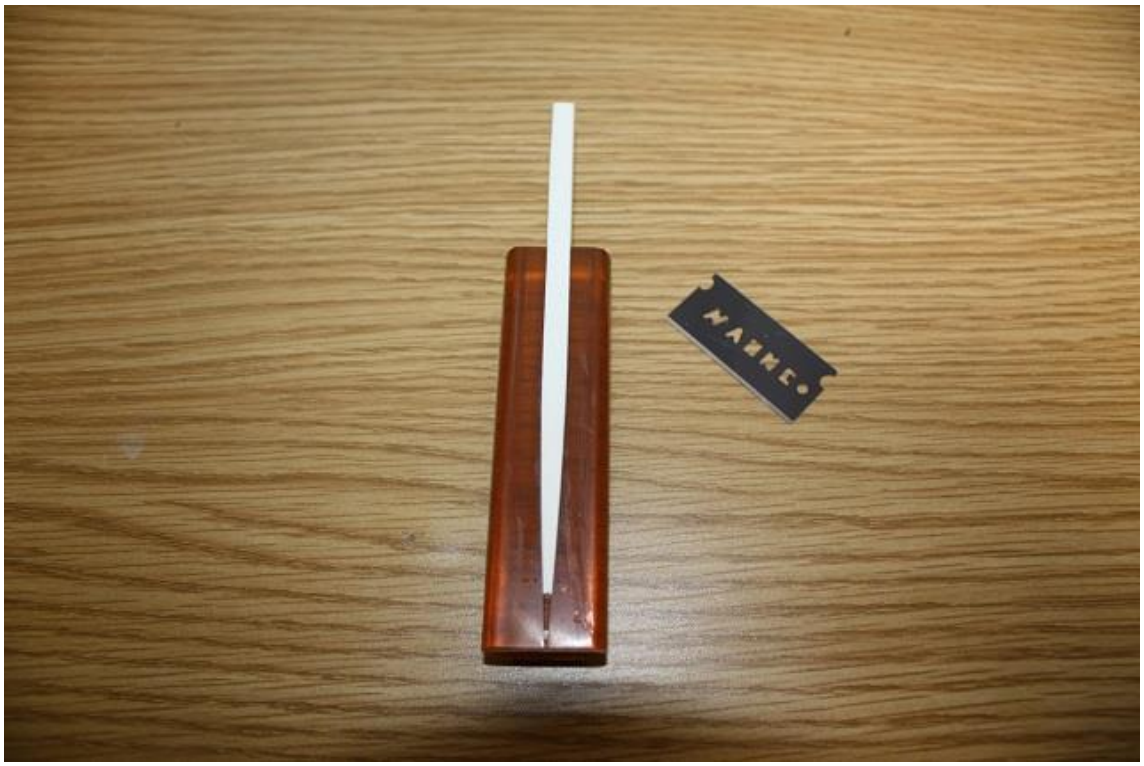
画像３：２本の羽根を２つに割った状態、２組あり、右側が羽根の表側、左側で筋が入っているほうが、羽根の裏側



画像４：羽根を２つに割った表側のみを使用する。

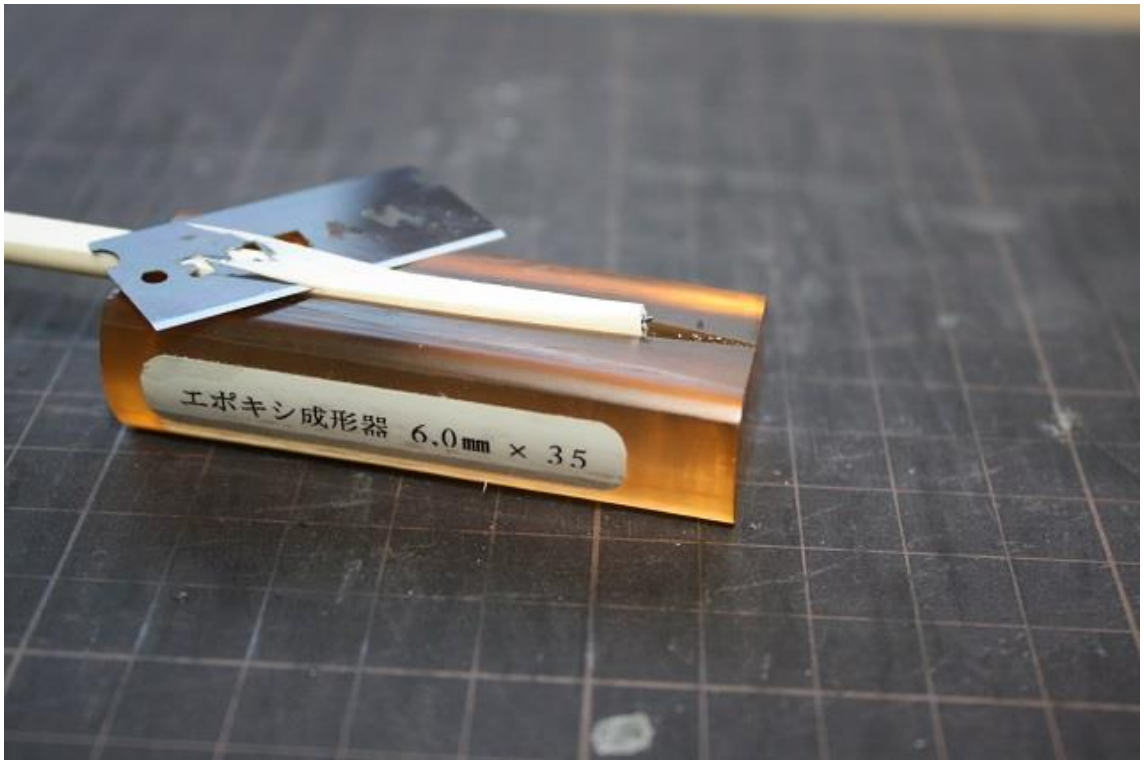
（２）羽根２枚合わせの脚側の成形

羽根の２枚合わせを製作する際に羽根の脚側をカミソリで成形する。

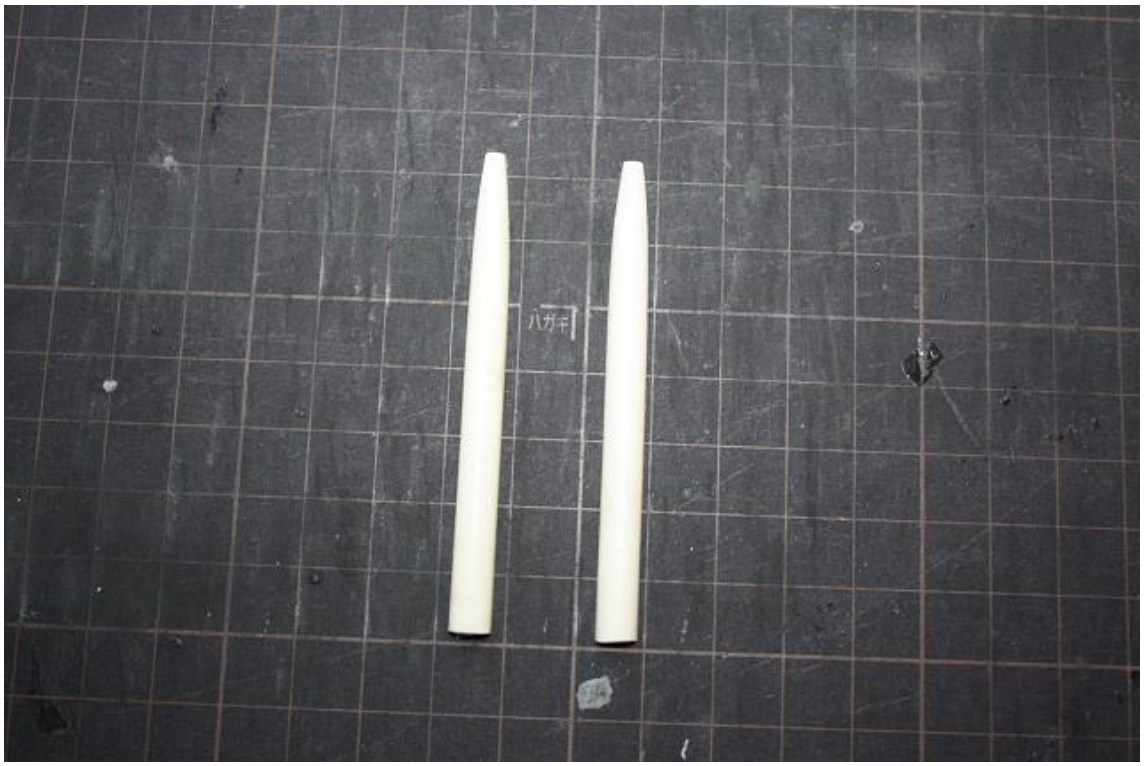


画像５：羽根の２枚合わせを製作する際に羽根の脚側の成形

２つに割った羽根の表側を成形器に入れ、羽根の足側をカミソリでカットする。



画像６：成形器の溝が舟形に加工してあり、盛り上がった羽根部分をカミソリでカットする。



画像７：カットした後の羽根の表側の状態

画像８：

紙ヤスリで微調整し、絞り成型器の所定の寸法まで、入るようにする。

画像９： 脚側の成形用の型、直径やテーパーの長さが異なり、かなりの数が存在する。

（３）羽根２枚合わせの脚側のくせづけ

羽根の２枚合わせは、硬度の違う羽根を合わせるで、どうしても後々狂いが生じてくる。ガラス管で熱する方法もあるが、私の場合、２枚合わせは画像のように、エポキシ成形器で、水をつけて自然乾燥している。完全乾燥に約 1 週間程度の日数がかかるが、後々狂いが出る確率は減少する。

画像１０：羽根の２枚合わせを製作する際に羽根の脚側のくせづけ

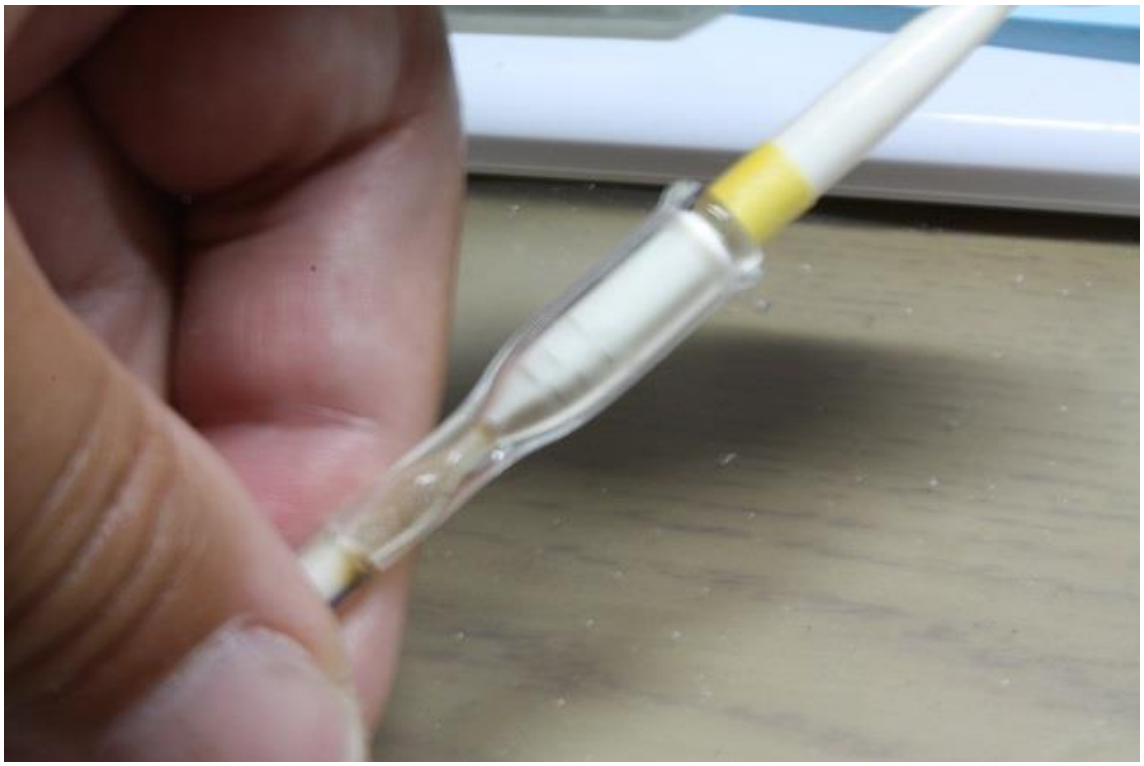
エポキシ成型器を用い、水をつけた羽根をエポキシ成型器の中に挿入し、自然乾燥している。完全乾燥に約１週間程度の日数がかかるが、後々狂いが出る確率は減少する。

画像１１： 脚側のくせづけ用の成型器、直径やテーパーが異なり、かなりの数が存在する。

画像１２：完全乾燥した状態、糸で仮巻きする必要がないほど、完全に形ができている。
この段階で、接着はしない。

その後、カヤ＆１本取りと同じ方法でトップ側の加工を行い、接着する。

（４）羽根の２枚合わせの頭側の成形
カヤ、羽根１本取りウキの上部と同じ工程になる。
片刃のカミソリで大まかにカットした後、紙ヤスリで所定の寸法に削っていく。
ガラス管に入れ、ガラス管を物差し代わりに、カヤや羽根を削っていく。きれいに削れた後は、アルコールランプで熱を加え、クセ付けする。



画像１３： ガラス管に差し込みながら、隙間が空かないよう、所定の寸法に到達するように、紙ヤスリで削っていく。

これでボディ関連の解説を終了し、次回は足の素材の違いについて、解説していきたい。